

不意の大水

山崩れなどにより川がせき止められることがあります。せき止めた土砂は、川の上流に貯まった水の量に耐えられなくなると決壊し、水が一気に流れて下流に被害をもたらします。今回は、高知県の四万十川と徳島県的那賀川の例をご紹介します。

■四万十川の大水（高知県四万十町）

明治23年（1890）9月11日、数日來の雨が午前中に激しくなり、四万十川が増水し、窪川町（現四万十町）の平地では昼頃に家々が浸水、田畑が水没しました。しかし、夕方になると川の水は急に引き始め、西の方から陽が差し出し、人々は安心しました。その1、2時間後にすさまじい山鳴りがとどろき、川沿いの西川角、仕出原などの集落は水没し、家屋や牛馬が流され、不意をつかれた数多くの死傷者が出ました。後になって分かったことですが、上流の東津野村（現津野町）倉川で山崩れが起き、その後川をせき止めていた土砂が崩壊したため、濁流が下流を襲ったのでした。仕出原の高岡神社に当時の水測標が建てられています。〈参考資料：窪川町史編集委員会編「窪川町史」（2005年）など〉



■那賀川の大水（徳島県阿南市）

四万十川の大水から2年後の明治25年（1892）7月25日、豪雨のため、那賀川上流の下木頭村（現那賀町）の高磯山北斜面で大崩壊が発生しました。崩れた土砂は麓の荒谷と対岸の春森の集落を埋没させて、那賀川をせき止めました。水を貯えた土砂は27日午後4時頃に決壊し、濁流は下流の各地に被害をもたらしました。阿南市大野では那賀川の堤防が600余間決壊し、平坦地がすべて浸水するなどの被害を受けました。この時、土砂崩壊の情報は事前の警告や直前の警鐘乱打などで伝えられていましたが、逃げ遅れた人もいました。中大野町の楠木神社には、3人が登って難を逃れたと言われる大楠が残っています。〈参考資料：阿南市史編さん委員会編「阿南市史第3巻」（2001年）など〉

